

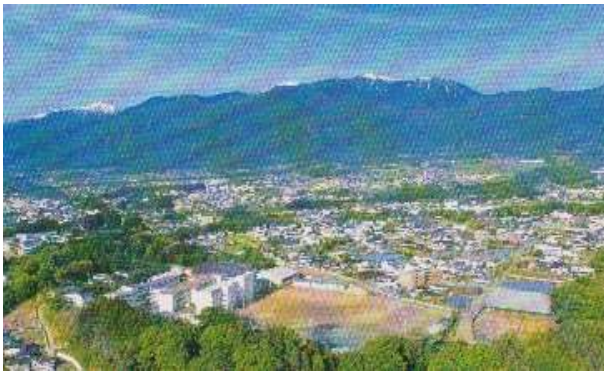


## 卒業 60 周年の同期会

「この様子だと心待ちにしていた 5 年ぶりの同期会に出席できなくなるかも」——東京方面からの参加者は気をもんでいた。開催日は 10 月 23 日。母校は長野県の南アルプスと中央アルプスに挟まれた伊那谷の高台にある県立伊那北高校。台風 19 号の影響で中央線の特急は 10 月末まで不通、高速バスも中央道の復旧が 22 日までかかるだろう、との予報が出ていた。幸いにも陸路は 19 日に復旧し東京方面からは 20 人ほどがバスと自家用車で駆けつけた。全員が“最後の同期会”との心で臨んでいた。

開会の言葉、校歌斉唱、物故者への黙祷、代表挨拶、経過報告、乾杯、飲食をしながらの懇親会、応援歌合唱、万歳三唱、記念撮影、と和やかに進行していったが、代表の挨拶には感ずるものが深かった。「すでに多くの仲間が亡くなっています。本人の体調や連れ合いの介護等で家から出られない仲間も多いなかでここに集うことができた我々は本当に幸せ者です。どうか残りの人生を意義あるものにしていきましょう」

ショックだったのは物故者の数が出席者を上回っていたことだった。台風の影響で参加できなかった人も数人はいたが、それにしても物故者が 59 人、出席者 50 人という数はどう考えても残念だ。卒業生の総数は 6 クラスで 260 人。すでに鬼籍に入っている人が約 4 分の 1、出席者は約 5 分の 1 ということになる。



「元気してるかい?」。久しぶりに会った旧友からの挨拶も、まずは体調についての問いかけから。「イヤッ、膝が痛くなり始めてさ」「血圧の他に 3 種類の薬を飲んでいる」「オレも薬の組み合わせを間違わないように神経を使うんだ」「家内の面倒を見なければいけないので二次会は遠慮するよ」・・・全員が 78 歳か 79 歳であ

る。「年齢には勝てない」は厳然たる人生の行程だということを改めて感じさせられた次第だった。「前立腺肥大でトイレが近い」ことだけが当面の問題という自分などは、ありがたいことに“超恵まれている”と思ったところだった。

宴会の前には母校を訪問し、副校長の案内で校舎内や授業見学をした。2 階建て、3 階建て、4 階建てのコンクリート校舎。きれいな校舎内と施設の充実ぶりには感嘆し羨望の思いさえも抱いた。

実は自分たちの在学中には校舎が火災で消失し授業のできる教室が無くなってしまった。焼け残った体育館と講堂を、高さ 2 階ほどのベニヤ板でそれぞれ 6 部屋に仕切り、それが“代用教室”となった。上部は高く天井まで空いているから、隣の教室の先生の授業や誰かが怒られている声までも聞こえてきた。新校舎が建つまでの約 1 年半、勉強環境は最悪だったと言えるだろう。でもその中で「我々にはハンデがある」と皆は必死で勉強した。その結果、この年の進学実績は 100 年の校史の中でもベストではないか、仏教で言う「変毒為薬」（へんどくいやく＝毒を変じて薬と為す）ではないかと個人的には思っている。

同期会は、残された人生をどう意義あるものにしていくか改めて考えさせられる機会となった。自分の場合「2030 年の創価学会創立 100 周年を目指して世界平和へ最大限の貢献をし 90 歳で PPK<ピンピンコロリ>」という目標を改めて確認したところだ。